



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	都市の育児援助システムにおける「子育てサロン」の機能
Author(s)	工藤, 遥
Citation	研究論集, 13, 453(左)-474(左)
Issue Date	2013-12-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/54087
Type	departmental bulletin paper
File Information	027_KUD0.pdf



都市の育児援助システムにおける 「子育てサロン」の機能

工 藤 遥

要 旨

子育て家庭の孤立や育児不安の拡がりを背景に、日本では「子育てサロン」と呼ばれる地域子育て支援拠点づくりが全国的に進められている。地域に住む乳幼児の親子が集う場である子育てサロンは、育児に関する情報提供や相談等を行うフォーマルな子育て支援機関であるが、大都市では、母親同士が「ママ友」等の育児ネットワークを形成し、インフォーマルな育児援助を交換する場・機会としても機能している。

本稿では、少子化と核家族化が顕著な大都市である札幌市で実施した質的調査をもとに、子育てサロンおよびその内部における母親同士の育児援助の機能を、「子育てサポートシステム」の視点から検討した。この分析枠組みでは、乳幼児の母親の子育てを支える育児援助は、制度的支援と関係的支援の2つのサポート構造と、3つのサポート機能（直接・間接・複合サポート）および2つのサポート側面（道具的・表出的サポート側面）でとらえられる。

制度的支援としての子育てサロンは、運営形態により、センター型、児童館型、地域主体型、常設ひろば型に4分類できる。各類型の子育てサロンでは、保育や発達教育、リフレッシュ支援といったフォーマルなサポート機能が異なっている。また、施設内部で母親同士が相互に行うインフォーマルな関係的支援のサポート機能も、それぞれ異なる特徴や段階がみられる。

また、子育てサロンにおける集まりの一部では、母親同士の互助の進展と並行して、育児ネットワークや小集団の形成がみられ、集まりの3つの段階（coming, keeping, working）を経て、「支えあい」の福祉コミュニティへと発展する可能性もうかがわれる。ただし、「子育て」の視点に立てば、家庭内および子育てサロンの内部における第一・第二の母子孤立を解消し、子どもの発達に重要となる性別・世代混成的なコミュニティを目指した子育て環境づくりが望まれる。

〈キーワード〉 子育てサロン、育児ネットワーク、福祉コミュニティ

1 はじめに

年少人口割合が13.1%（2011年）である少子社会の日本では、3歳未満の乳幼児の約8割が保育所等を利用せず、家庭において養育されている（内閣府，2012a）。一方で、未就学児のいる家庭の8割以上は核家族世帯であり、家族を取り巻く地縁・血縁ネットワークが脆弱化し、男性の長時間労働と家庭内役割分業が顕著な中で、母親一人による「孤育て」（立山，2011）が引き起こす育児不安や育児負担が問題となっている。さらに、母子孤立の子育て環境は、子どもの発達に重要な第一次集団を縮小させるため、「子育て」（船橋，1999；傳馬，2006）の環境としても問題視されている。子育て・子育てに必要な援助システムを整備し、子どもと家族が近隣や地域社会と関わり合える社会環境をつくることは、日本における重要な政策課題となっている。

こうした中で、子育て中の親子が気軽に集い、相互交流や子育ての不安・悩みを相談するための「地域子育て支援拠点づくり」⁽¹⁾が全国的に進められている。制度としては、1993年より保育所等において地域の子育て家庭に対する育児相談や、子育てサークル等への支援を行う「地域子育て支援センター事業」が開始され、2002年からは、乳幼児の親子が交流できる「つどいの広場事業」が実施された（内閣府，2004）。「子育てサロン」や「子育てひろば」等と呼ばれるこうした地域子育て支援拠点は、2005年からの「子ども・子育て応援プラン」により、約6,000か所設置され（図1）、今後2014年までに、市町村独自の事業と合わせて1万か所設置する政策目標が掲げられている（内閣府，2010）。



図1 地域子育て支援拠点事業実施箇所数

出典：内閣府（2004：130-131，2008：120，2010：118，2012b：129），厚生労働省（2011，2012）より筆者作成

2 子育てサロンと育児ネットワーク

関井らによれば、「育児援助システム」とは、制度や施策といったフォーマルな育児援助と、親族や地域といったインフォーマルな育児援助の両者であるとされる(関井ら, 1991: 72)。子育てサロンや保育サービス, 各種の家族手当や養育保障等のフォーマルな育児援助が拡充されている一方で, 社会学をはじめとする家族研究の領域では, 親族や友人, 近隣等の「育児ネットワーク」⁽²⁾が行うインフォーマルな育児援助に関する研究が進められている。

日本では1970年代より育児不安や育児ノイローゼ等が家族問題として取り上げられ, 育児の当事者がもつ社会関係に焦点を当てた実証研究が行われるようになったとされる(山根, 2006: 53)。日本における育児ネットワーク研究の先駆者として知られる落合(1989)は, 育児役割の遂行を容易にするために母親に対して与えられる直接・間接の助力を「育児援助」と定義し, 都市部と郡部のインフォーマルな育児援助を比較した。落合によれば, 育児援助は, 育児労働そのものの一部あるいは全部を代行する「直接的育児援助」と, 母親の育児役割遂行を側面から支える「間接的育児援助」に大別され, 後者はさらに情緒的, 情動的, 経済的な育児援助に区別される(同書: 99)。

母親の育児ネットワークは, 世帯内の夫(子どもの父親)および同居親族と, 世帯外の親族および非親族で構成されるが(松田, 2001: 36), 世帯外の友人や近隣を含む非親族ネットワークの中でも, 子どもを通じて知り合った母親同士の友人関係は「ママ友」と呼ばれ(實川・砂川, 2012: 183), 母親本人の就学や就労で形成される友人関係とは区別される。育児期の女性にとってママ友は, 子育てを支える「資源」である一方で, 葛藤等を引き起こす「ストレス源」ともなる。前田(2004)によれば, 子どもを通じて形成される母親同士のネットワークは, 母親役割から離れた個人的欲求を十分に満たすことは難しく, 密度が高すぎる場合には育児不安を増大させる可能性もある。とはいえ, 密度の高いネットワークは, 親交や育児の実体的な相互援助といったサポートを増加させるため(同書: 28-29), 人口移動性が高く, 孤立育児状態におかれた専業主婦が集住する大都市郊外においては, 母親のネットワークづくりを支援する施策も有効であると考えられる(前田, 2003: 66)。

育児期女性の非親族ネットワークは, ①いわゆる「公園デビュー」や, ②幼稚園・保育園への入園, ③小学校への入学を契機に, 子どもの年齢に伴って再編が促進される(前田, 2004: 30)。松田(2008)によれば, 末子年齢が低く, 子どもが少ない地域に住み, 居住年数が短く, 社会階層が低く, 平均的な母親年齢から離れた母親ほど, 育児ネットワークが脆弱であるため, とくにこうした母親に対して「育児期で自分と同じ関心や境遇の人とのネットワークをはぐくむ機会を増やすためのきっかけや場づくり」が必要とされる(松田, 2008: 174-175)。したがって, 少子化した都市社会では, 地域において母親同士が育児ネットワークを構築し, インフォーマルな育児援助を交換する場として, 地域の子育てサロンが果たす役割が大きいと考えられる。

以上をふまえ、本稿では、乳幼児の母親に対して、子育て支援の専門機関や団体等が行うフォーマルな育児援助を「制度的支援」、育児ネットワーク等が行うインフォーマルな育児援助を「関係的支援」と呼び、両支援を総合した「子育てサポートシステム」(工藤, 2013)の観点から、制度的支援としての子育てサロンおよびその内部で母親同士が行う関係的支援の機能について、札幌市における質的調査をもとに検討する。

3 調査概要

合計特殊出生率が1.09(2011年)である札幌市は、日本の政令指定都市の中で最も少子化が顕著な大都市である。子育て世帯の9割以上が核家族で、専業主婦世帯が多く、男性の労働時間も長い⁽³⁾札幌市では、家庭内の家事や育児の多くを母親が行っていると想定される(札幌市, 2010:19)。子育て家庭が社会から孤立しやすくなっている昨今の子育て環境を考慮し、札幌市でも子育てサロンが市内に約300か所設置されている。今回の調査は、2012年6月から2013年8月にかけて、札幌市内5区にある9か所の子育てサロンにおいて、半構造化インタビュー形式で実施した。

表1 子育てサロンの4類型

類型	実施場所	実施タイプ	実施主体	実施所数	調査地
センター型	札幌市子育て支援総合センター	常設(月～土・日祝 9:00～17:00)	札幌市	1か所	Aセンター／中央区
	各区・保育子育て支援センター	常設(月～土9:00～17:00・月1回日曜10:00～12:00)		7か所	Bセンター／西区
児童館型	各児童会館	常設(週3回平日 9:00～12:00)	札幌市青少年女性活動協会	12か所	C児童館／白石区 D児童館／西区
			NPO	6か所	
		非常設(週1回平日 10:30～12:00)	札幌市青少年女性活動協会	81か所	E児童館／北区
地域主体型	各団体の活動拠点	非常設(月1回程度 10:00～11:30)	地域団体、NPO	185か所	地域サロンF／北区 地域サロンG／白石区
常設ひろば型	各団体の活動拠点	常設(週3回以上・ 1回5時間以上)	NPO、地域団体	8か所	NPOサロンH／西区 NPOサロンI／豊平区

出典：札幌市および調査先の資料・ホームページより筆者作成(2013年10月現在)

3.1 調査地の概要

今回調査を行った9か所の子育てサロンは、運営形態により、「センター型」、「児童館型」、「地域主体型」、「常設ひろば型」の4類型に分類できる(表1)。以下では、まず、類型ごとに各調査地の概要を示す。

3.1.1 センター型

自治体が運営主体である「センター型」の子育てサロンは、札幌市内に合計8か所ある(2013年10月現在)。今回は、全市対象のAセンターと、西区のBセンターの2か所で調査を行った。

(1) Aセンター

札幌市の中心部中央区にあるAセンターは、小学校・保育所・子育てサロン・学童保育の4つの機能を備える総合的な子育て支援施設であり、札幌市で唯一の全市対象・年中無休の常設子育てサロンが毎日朝9時から夕方5時まで開催されている。土日祝休日にも開かれているため、専業主婦の母親のみならず、働いている母親や父親、祖父母の姿も見られる。施設内は、非常に広々としており、木製のボールプールやおもちゃがあるプレイルームのほかに、乳児室や製作コーナー、絵本や育児本とパソコンが設置された図書・情報コーナー、屋外には芝生や砂場の設備もある。また、専門職員による子育て相談や情報提供の機能も備えている。

(2) Bセンター

西区のBセンターでは、毎週月曜日から土曜日の9時から17時まで常設子育てサロンが開かれている。日曜日は月に1回「サンデーサロン」も開催されており、子どもの父親や祖父母も利用する。Aセンター同様、併設する保育所では一時保育が実施されているほか、保育士や栄養士、看護師等の専門職員が配置され、子育て全般に関する専門的な相談支援が行われている。また、サロンを手伝う地域のボランティアも多い(2012年度のボランティア登録者は35名)。都心部のAセンターには全市から利用者が集まるのに対し、Bセンターのような区のサロンには、近隣の利用者が集まる。

3.1.2 児童館型

児童館の空き時間を利用した地域子育て支援拠点として、地域の親子が集い、交流する場となっている児童館型の子育てサロンには、週3回以上開催される常設タイプと、週1回の非常設タイプがある。今回は、常設タイプのC児童館とD児童館、非常設タイプのE児童館のサロンで調査を行った。

(1) C児童館

白石区のC児童館は、マンションやアパートが多い地域にあり、最寄りの地下鉄駅からは徒歩で8分程度である。3か所の児童館のうち最も広いC児童館の体育館は、ブロックのおもちゃやボール、人形、ままごとセット等で4か所にコーナー分けされ、10時からの1時間程は、主に1～2歳児の親子が遊ぶ。0歳児の親子は別の乳児部屋で過ごす。11時頃からは体育館で専門職員による「リトミック」(発達教育)が行われており、40組程の母子が輪になって踊る。地域の高齢者ボランティアが毎回2、3名程来ており、一部は、同じ地域にある地域サロンG(後述)でも活動している。

(2) D児童館

西区の丘陵地域にある戸建て住宅街に位置するD児童館は、最寄りの地下鉄駅からバスで

20分程の場所にあり、車で来る利用者も多い。他の施設とは異なり、D 児童館の館長は男性で、民生委員の高齢者や一般の男性ボランティアも5名いる。自由時間には、体育館で幼児がボランティアや母親と遊び、乳児の親たちは施設中央の部屋で談話している。数名の母親は別室で高齢者ボランティアに工作を習い、その後、15組程の親子全員が体育館でダンス遊びをしていた。近所の小学生の訪問学習等、地域との交流も活発である。

(3) E 児童館

北区のE 児童館は、最寄りの地下鉄駅から徒歩20分程の緑に囲まれた戸建て住宅地域にある。週1回のサロンには毎回40組程の親子が参加している。1階のプレイスペースには、15組程度の乳児と母親が密集し、児童館の館長や職員、高齢者ボランティアによる声かけも活発である。毎回遊びのテーマがあり、夏には屋外の簡易プールで水遊びができる。他の児童館と同様、1時間程の自由時間の後、児童館職員によるダンスや歌遊びの時間がある。

3.1.3 地域主体型

2013年現在、札幌市内には180か所を超える地域主体型の子育てサロンが設置されている。多くは、地域団体等が任意で運営しており、町内会館や小学校の空き教室、ミニ児童館、住宅団地の集会室等で月に1回程度、10時から11時半まで開催されている。子育て中の親子が集い、近隣住民とも交流する場としての機能とともに、子どもの育ちを地域で見守る地域社会環境づくりの機能がある。今回は、北区の地域サロンFと白石区の地域サロンGを訪問し、後者では利用者の母親2名にインタビューを行った。

(1) 地域サロンF

地域サロンFは、毎月1回、第2水曜日の10時から11時半に、北区にある小学校の視聴覚室で開かれている。調査した日は、民生委員や町内会の高齢者ボランティアが男女合わせて12名程度、保健センターの職員が2名いた。利用者は2～3か月の乳児を含む母子十数組である。布が敷かれたスペースには、手づくりのおもちゃが置かれ、母親たちはそれぞれ好きな場所で子どもを遊ばせ、情報交換や談話をしていた。10時半頃になると小学校低学年の児童が遊びに訪れ、11時過ぎからは、母子が保健センターの職員の周りに集まり、歌遊びや、紙芝居の読み聞かせを楽しんでいた。

(2) 地域サロンG

地域サロンGは、毎月第3木曜日に白石区の地区会館で開かれている。今年で活動10年目を迎えるこの団体のメンバーは、元保育士等の高年女性ボランティアが中心である。調査した日は、32組の親子と、ボランティアが10名、民生委員1名、他の子育て支援団体の関係者が2名参加していた。手づくりの装飾で飾られた会場内には、月齢別のおもちゃコーナーが4か所設置され、工作コーナーではボランティアに子どもを預けた母親たちが折り紙をしていた。11時から、月別のお誕生日会が開かれ、その後、母子全員で輪になり、音楽とお手玉を使った親子遊びや歌を楽しんでいた。

3.1.4 常設ひろば型

常設ひろば型の子育てサロンは、地域の NPO 等が運営しており、2013 年 10 月現在、週 3 回以上、1 回 5 時間以上開催の常設タイプが、市内に 8 か所ある。常設ひろば型のサロンは、設立背景や支援内容も様々であるが、今回は西区の NPO サロン H と豊平区の NPO サロン I の事例を取り上げる。

(1) NPO サロン H

NPO サロン H の運営主体は、ワーカーズ・コレクティブ事業⁽⁴⁾を行う NPO 法人である。2006 年から児童発達支援事業を行っていたが、施設を地域の親子にも開放し、2012 年に札幌市指定の地域子育て支援拠点となった。1 日十数組程度の親子がサロンを利用している。スタッフは、主に中年の女性であり、2/3 が保育士の資格をもち、全員が子育て経験者である。事業内容は子育てサロン以外にも、赤ちゃんからお年寄りまで利用できる「地域の居場所」として施設が毎日開放されているほか、親子向けのイベントや母親のリフレッシュ支援、子育て講座、未就園児向けの幼児クラブや小学生向けの放課後クラブ、保育・見守り・家事支援サービス等、多様な支援が行われている。

(2) NPO サロン I

豊平区の NPO サロン I は、キリスト教会に併設する幼稚園の保護者らが 2007 年に、放課後の居場所づくりのために教会の建物と幼稚園のホール・園庭を利用して始めたサロンである。現在は子育て中の母親や地域の高齢者、障がい者の有償スタッフら計 14 名で運営されている。週 3 回の開催日のうち、月曜日は 0～2 歳児の親子が対象だが、水曜日と金曜日は「多世代交流広場」としており、乳幼児や小学生の親子だけでなく、学生や高齢者、フリーター、不登校の生徒等、様々な人々が集まる場となっている。また、地域住民や利用者自身によるボランティア活動や企画も活発であり、高齢者ボランティアによる読み聞かせや、地域の漫画家による「まんが・イラスト教室」、利用者の母親による「ダンス教室」、うつ病や DV 問題の専門家による講座等の企画が開催され、子育て支援を超えた活動が行われている。

3.2 調査対象者の概要

今回は、地域サロン F を除く 8 か所の子育てサロンで、利用者である乳幼児の母親計 64 名にインタビュー調査を実施した⁽⁵⁾ (表 2)。うち 29 名は、札幌市内各区から利用者が集まる A センターでの回答者である。調査対象者の母親の特徴としては、年齢が 20 代～40 代で、専業主婦が 47 名と最も多く、育児休業中が 10 名、就業中が 5 名である。全体の 2/3 は 1 人、1/3 は 2 人の子どもをもち、末子年齢は 0～2 歳が中心である。母親本人または夫の親と同居しているのは 4 名で、ほか 4 名は夫婦両方の親が近居し、36 名は夫婦どちらかの親が近居し、19 名は親族と離れて暮らす核家族世帯である。

表2 インタビュー調査対象者の属性（人数）

調査地 (子育てサロン)	A センター (29), B センター (7), C 児童館 (8), D 児童館 (3), E 児童館 (9), 地域サロン G (2), NPO サロン H (3), NPO サロン I (3)
本人年齢	20代 (13), 30代 (38), 40代 (6), 不明 (7)
子ども数	1人 (41), 2人 (21), 3人 (1), 不明 (1)
末子性別	男 (30), 女 (33), 不明 (1)
末子年齢	0歳 (23), 1歳 (19), 2歳 (17), 3歳 (3), 4歳 (1), 不明 (1)
親族居住状況	同居 (4), 両方親近居 (4), 本人親近居 (29), 配偶者親近居 (7), 非同近居 (19), 不明 (1)
居住地域	白石区 (15), 中央区 (13), 西区 (12), 北区 (9), 豊平区 (6), 東区 (3), 南区 (3), その他 (2), 不明 (1)
本人学歴	中学校 (1), 高等学校 (9), 専門学校 (13), 短期大学 (10), 四年制大学 (14), 大学院 (3), 不明 (14)
本人職業	主婦 (47), 会社員 (2), 公務員 (1), パート (2), 育児休業中 (10), その他 (1), 不明 (1)
配偶者職業	会社員 (38), 公務員 (12), 自営業 (4), 配偶者無 (2), 不明 (8)
世帯年収	100-299万円 (5), 300-499万円 (21), 500-699万円 (17), 700-999万円 (9), 1000-1499万円 (1), 不明 (11)

4 分析枠組み

本稿では、育児の中心的役割を担う母親を支える援助システムを構造と機能でとらえる「子育てサポートシステム」の分析枠組みから、子育てサロンおよび母親同士による育児援助の機能を分析する。

子育てサポートシステムにおけるサポートの構造は、(I)夫や親族、ママ友、近隣等の人的関係資源が提供する支援である「関係的支援」と、(II)国や自治体、地域組織や民間企業、NPO等が提供する「制度的支援」の二大構造から構成される。このサポート構造の分類と、金子(2003)が提示している社会的支援の分類⁶⁾を合わせると、今回の分析対象である4種類の子育てサロンの中でも、センター型と児童館型は自治体や公的機関による「公助」、地域主体型と常設ひろば型は地域の住民や団体による「共助」に該当する制度的支援である。また、これらのサロンにおいて行われる母親同士(ママ友)による相互援助は、関係的支援の中でも「互助」として分類される。

一方、サポートの機能は、(A)母親のケア行為(育児遂行)を直接的に肩代わりするサポートである「直接サポート」と、(B)母親がケア行為を行えるようにサポートする「間接サポート」、(C)関係的支援あるいは制度的支援の一方が、もう一方の機能を促進する形で、両支援が複合的に母親のケア行為を支える「複合サポート」の3つの基本機能から構成される。さらに、各サポート機能は、①目的達成のための労働、情報、物資、手段の提供が主機能である「道具

的サポート側面」と、②情緒や認知、知能への働きかけが主機能である「表出的サポート側面」といった2つの側面に区別される。

以上の構造と機能の分析軸から、6種類のサポートをまとめたのが表3である。本稿ではまず、子育てサロンの4つの類型ごとに、その機能を制度的支援の3種類のサポート分類（ⅡA、ⅡB、ⅡC）から分析する。次に、それらの子育てサロンにおける母親同士の互助についても、関係的支援の3種類のサポート（ⅠA、ⅠB、ⅠC）から分析する。以上の手順で、都市の子育てサポートシステムとしての子育てサロンと母親同士の育児援助機能の実態を考察する。（ただし、今回は経済的な育児援助に関する分析は除く。）

表3 サポートの6分類

		Ⅰ. 関係的支援 (母親同士・ママ友 による互助)	Ⅱ. 制度的支援 (子育てサロンによる 公助・共助)
A. 直接サポート	道具的サポート側面	Ⅰ A. 関係的・直接サポート	Ⅱ A. 制度的・直接サポート
	表出的サポート側面		
B. 間接サポート	道具的サポート側面	Ⅰ B. 関係的・間接サポート	Ⅱ B. 制度的・間接サポート
	表出的サポート側面		
C. 複合サポート	道具的サポート側面	Ⅰ C. 関係的・複合サポート	Ⅱ C. 制度的・複合サポート
	表出的サポート側面		

5 子育てサロンの育児援助機能

はじめに、制度的支援である子育てサロンの育児援助機能を検討する。4種類の子育てサロンそれぞれについて、直接サポート、間接サポート、複合サポートの3つのサポート機能と、その道具的サポート側面および表出的サポート側面を、調査結果にもとづき分析する。

5.1 子育てサロンによる直接サポート

子育てサロンの直接サポート機能（表3のⅡA）としては、「保育」や「預かり」により母親のケア行為を代替する道具的サポート側面と、母親の代わりに子どもの「遊び相手」や「発達教育」を行う表出的サポート側面がある。

センター型の子育てサロンでは、道具的サポートとして、子育て講座の際に無料の託児サービスが実施されているほか、併設の保育所では有料で一時保育が実施されている。また、表出的サポートについては、専門職員やボランティアによる遊びや、読み聞かせ等の発達教育のサポートが行われている。

児童館型の子育てサロンでは、主に高齢者ボランティアが預かり等の道具的サポートと遊び

相手等の表出的サポートを行っている。一方、児童館の職員は、集団の母子を対象に歌やダンス等の「リトミック」と呼ばれる専門的な発達教育で表出的サポートを提供している。

地域主体型の子育てサロンでも、児童館型と同じように高齢者ボランティアが子どもを預かる道具的サポートを提供している。例えば、地域サロン G では、子どもを2人連れてきた母親が長子と遊べるよう、高齢者ボランティアが1時間半の間、末子（乳児）の面倒をみていた。また、表出的サポートとしては、ボランティアによる遊びや出し物のほかに、元保育士のボランティアや保健センター職員が、絵本や紙芝居の読み聞かせを行っている。

常設ひろば型のサロンでは、NPO サロン H が実施している一時保育や幼児クラブ等の有料の保育サービスと、NPO サロン I のようにスタッフが子どもの預かりや見守りをする道具的サポートが行われている。表出的サポートには、スタッフやボランティアによる遊びや読み聞かせがあり、例えば、NPO サロン I では、80代の高齢者が童話や民話を語る「素語り会」が毎月開かれている。

5.2 子育てサロンによる間接サポート

子育てサロンの間接サポート機能（表3のII B）としては、「遊び場」としての機能や、育児関連の「情報提供」や「講座」、「家事支援」等の道具的サポートと、「専門相談」や「リフレッシュ支援」等の表出的サポートがある。

センター型のサロンにおける道具的サポートとしては、とくに A センター利用者から、「施設の広さ」や、「開館時間の長さ・開館日の多さ」、「施設の清潔さ」といった遊び場機能に関する意見が多くあげられ、「おもちゃの多さ・質」については B センターでも児童館と比べて評価が高かった。そのほか、育児関連の制度やサービスに関する情報提供や、保育士や栄養士等による各種の育児講座といった道具的サポートと、専門家による育児相談や電話相談、リフレッシュ講座といった表出的サポートが行われている。

児童館型のサロンでも、道具的サポート側面として、利用者から「スタッフが親切・安心」、「おもちゃが良い」、「施設が広い」等、遊び場機能に関する意見が多くあげられた。また、近隣のイベントや育児関連の情報提供といった道具的サポートとともに、児童館職員による育児相談、高齢者ボランティアの企画によるリフレッシュ支援等の表出的サポートがみられる。

地域主体型のサロンでは、遊び場機能に関して、「比較的少人数であること」や、「低年齢児・乳児が集まっていること」、「近所にあること」が利用の利点とされている。また、高齢者ボランティアが、出し物や遊びなどの道具的サポートと、母親向けの工作指導といったリフレッシュ支援の表出的サポートを行っている。

常設ひろば型の子育てサロンは、遊び場や育児情報のほかにも、独自の子育て講座や勉強会、家事サービス等多様な道具的サポートを提供している。一方、表出的サポートについても、例えば、NPO サロン H では母親向けのカフェや、裁縫や体操の教室を開いており、NPO サロン

Iでもダンスや茶道の体験企画等，母親のためのリフレッシュ支援が実施されている。

5.3 子育てサロンによる複合サポート

子育てサロンの複合サポート機能（表3のIIC）には，「母親同士の交流機会や情報交換の場の提供」や「子ども同士の社交や交流の機会・場の提供」といった道具的サポートと，「子育て支援やボランティア参加の奨励」といった表出的サポートがある。

センター型のサロンの道具的サポート側面について，例えばAセンターでは，「産科で同じ時期に出産したママ友たち5人との再会をするために来た。（A2）」のように，サロン以外の場所で知り合った母親同士が交流し，関係性を維持する場として利用されている。Bセンターも，継続的なママ友づくりではなく，他の母親とのその場限りの会話や子ども同士の交流が利用目的となっている。一方，表出的サポートとしては，高齢者や学生が子育て支援のボランティア活動を行う機会や情報を提供している。

児童館型のサロンに関しては，利用目的として，「ママ友との面会・相談・歓談」，「ママ友づくり・交流」があげられ，母親同士の相談や交流，ママ友づくりのための機会や場の提供といった道具的サポート機能がある。同時に，同じ月年齢の子どもの友達づくりや社交性を身につけるための機会・場としての機能もある。また，表出的サポートとしては，地域の高齢者や一般のボランティアが子育て支援を行う機会・場を提供している。

地域主体型の子育てサロンについては，保健センターからの情報で子育てサロンを「初めて」利用する，2～3か月の乳児をつれた母親もおり，利用目的としては，「同じ年齢の子ども同士の交流」や，「ママ友づくり」の場としての道具的サポート側面がある。一方，地域の高齢者ボランティアを中心に運営されている地域主体型のサロンは表出的サポート側面が顕著である。

常設ひろば型の子育てサロンは，道具的サポートとして，「母親同士が相談や話をする機会・場」と「子どもの友達づくりの場」といった道具的サポート機能があるが，前者については，センター型と比べると顔見知りの母親が多い一方で，児童館型と比べると特定の母親同士のグループが少なく，子育てサロン全体として「仲が良い」という意見が聞かれる。また，表出的サポートとしては，一般・学生・高齢者ボランティアが企画等で活躍しているだけでなく，利用者の母親自身が子育て支援提供者として活動を行う機会も提供している点が特徴的である。

表4は，以上の4種類の子育てサロンの3つのサポート機能をまとめた表である。各類型の子育てサロンでは，運営側が提供するフォーマルな育児援助，ボランティアが行うインフォーマルな育児援助の違いにより，直接サポートと間接サポートの内容に多様性がみられる。どのサロンも，主に「子どもの遊び場・交流の場」，「母親の社交・交流の場」としての複合サポート機能が利用目的の中心である。他方，実際の利用状況を観察する限り，各子育てサロンでは，親子同士の交流や関わり方の程度，内容に違いがみられる。

表4 子育てサロンの類型別にみた育児援助機能

	A. 直接サポート		B. 間接サポート		C. 複合サポート	
	道具的 ①保育(有料) ②預かり(任意・無料)	表出的 ①遊び ②発達教育	道具的 ①遊び場 ②情報提供 ③育児講座 ④家事支援	表出的 ①専門相談 ②リフレッシュ支援	道具的 ①母親の交流・情報交換の場 ②子どもの社交・交流の場	表出的 ①ボランティア支援・参加の奨励
センター型	①一時保育 ②講座託児	①職員, ボランティア ②読み聞かせ, 人形劇	①広い, 設備, おもちゃ, 安心 ②各種情報 ③専門講座	①専門相談, 電話相談 ②リフレッシュ講座	①ママ友との再会で利用, 病院・買い物のついでに利用 ②ふれあい	①学生・高齢者ボランティア
児童館型	②高齢者ボランティア	①職員, 高齢者・一般ボランティア ②リトミック	①安心, おもちゃ, 広い, 部屋別, 家から近い ②地域情報	①先生に相談 ②リフレッシュできる, 折紙・工作企画	①ママ友づくり, 相談・会話 ②同年齢の子, 子どもの友達づくり	①学生・一般・高齢者ボランティア
地域主体型	②高齢者ボランティア	①高齢者ボランティア ②出し物, 読み聞かせ, 歌遊び	①水遊びができる, 家から近い	②母親向けの折紙・工作企画	①ママ友づくり ②子どもの交流	①高齢者ボランティアが運営主体
常設ひろば型	①一時保育, 幼児クラブ ②講座託児, 見守り	①スタッフ, ボランティア ②読み聞かせ企画	①遊び場 ②育児情報 ③各種講座 ④家事サービス	②「ママカフェ」, 各種リフレッシュ講座(裁縫, 体操, ダンス, 茶道等)	①相談・会話, グループが無い, 顔見知り多い, 仲が良い ②子どもの友達づくり	①一般・学生・高齢者・利用者ボランティア, 母親企画, 専門家講演

6 母親同士の育児援助機能

次に、4種類の子育てサロンの内部における集まりの特徴や、親子同士の交流や関係性を明らかにするため、母親同士が相互に行う育児援助の内容を、関係的支援の3つのサポート機能および2つの機能側面から分析する。

6.1 母親同士による直接サポート

関係的支援者である母親同士(あるいはママ友)が行う直接サポート(表3のIA)には、子どもの「預かり・見守り」といった道具的サポートと、「遊び相手」といった表出的サポートが

ある。

A センターの利用者は、居住地域も様々で「初めて来た」という人も多く、B センターを含めセンター型は、他の類型のサロンと比べて利用頻度が少なく、母親同士は面識がないことが多い。また、センター型のサロンでは「自分の子どもは自分で見守る」のが原則であるため、基本的に他の子どもの預かりや見守りといった道具的サポートはみられない。表出的サポートについても、母親は子ども同士のトラブルが起きないように常と一緒に行動しているため、他の子どもの遊び相手をするのは、自分の子どもと一緒に遊ぶ場合に限られる。このため、センター型のサロンでは、子ども同士が同じおもちゃに興味をもったり、近くで遊びはじめたりすることをきっかけに、母親同士が出合い、会話をすることがあるが、継続的なママ友関係は構築されにくい。

児童館型のサロンは、週1回以上の日常的な利用がほとんどである。このため、児童館の母親たちは、母子ともに顔見知り以上の関係性であり、子どもの遊び相手といった表出的サポートだけでなく、一時的な見守りといった道具的サポートもみられる。

地域主体型の子育てサロンは、開催が月1回と限定的であることや、初めてサロンを利用する母親もいることから、そこでの母親同士の関係性は児童館型ほど親密ではない。また高齢者ボランティアが、子どもの預かりや遊び相手を積極的に行っているため、母親同士による直接サポートは少ない。

常設ひろば型の子育てサロンは、児童館型と同じように、地域の親子によって日常的に利用されているため、母親は他の子どもの遊び相手といった表出的サポートを行っている。また、子どもを「お互いに見守る」というインフォーマルな規則があるNPOサロンIでは、自分以外の子どもでもそばにいれば見守り、しばしば一人の乳児に対して何人もの母親が面倒をみているため、「誰が誰の子どもなのか分からない」場合もみられた。

6.2 母親同士による間接サポート

母親同士が行う間接サポート（表3のIB）としては、育児の「助言」や「情報提供」、「家事支援」等の道具的サポートと、「相談」や「社交・会話」の相手といった表出的サポートがあげられる。

センター型のサロンで出会う母親同士は、初対面であることが多く、顔見知りであっても、「毎日来るわけではないので、会った人と連絡を取るようなことはない。（A22）」、「児童館のお母さんとは、気が合うなと思えばその場ですぐ番号交換するし、仲良くしているが、ここではそういうのはない。（B2）」というように、継続的なママ友関係には発展しにくい。また、施設内では親子で遊び、周りと交流しない場合も多い。このため、センター型のサロンでは、情報交換等の道具的サポートと、社交等の表出的サポートは行われても、母親同士の個人的な助言や相談等のサポートは少ないと考えられる。

一方、地域の母親が週1, 2回の頻度で利用する児童館型のサロンは、利用目的の多くが「ママ友に会うため、話すため」であり、顔見知り以上のママ友関係が構築されている場合が多い。このため、道具的サポートとしても、情報交換だけでなく、育児経験のある母親からの助言もよく行われている。さらにD児童館では、「ママ友には、サロンの帰りに車で送ってもらったり、買い物で助けてもらっている。(D1)」のように、送迎や買い物援助等のサポートもみられた。表出的サポートに関しては、「子どもが寝ないことや、年齢による子どもの行動、離乳食のことについて、サロンの先生やママ友に相談する。(D3)」というように、育児の悩みや疑問を児童館でママ友に相談する場合も多く、「お母さん同士で色々と話ができる。(E5)」のように社交や会話によるリフレッシュを目的にも利用されている。

地域主体型のサロンでは、母親同士による情報交換といった道具的サポートや、社交・会話等の表出的サポートがみられるが、開催日が月に1回と限定的であり、ママ友への助言や相談を目的とした利用は少ないと考えられる。

常設ひろば型の子育てサロンでは、「育児の情報はここで聞くことが多い。(H1)」, 「育児で困ったときはここで相談する。上の年齢の子を持つお母さんに聞いたり、同じくらいの子の人〔母親〕に言ったり。(H2)」, 「ここにきているお母さんで仲良くしている人には少し相談できる。そういう雰囲気。(I2)」等、助言や情報提供等の道具的サポートと、相談等の表出的サポートの両方について多くの母親から意見が聞かれた。また、「他のサロンにもいくが、ここが一番楽。こういうところに来て、家にいないので、精神的な負担はない。(I1)」, 「家にいるのが嫌で、遊びに来た。児童館のサロンは仲のいいお母さんがかたまっているが、こっちはみんなでわいわいしゃべる。しゃべるとストレス解消になる。(H1)」という意見からは、オープンな雰囲気のサロンで、社交や会話をすることが、母親の精神的な安定に寄与していると考えられる。

6.3 母親同士による複合サポート

関係的支援者の複合サポート（表3のIC）としては、「ボランティア参加・活動」といった道具的サポートと、「機会・場の利用」といった表出的サポートがあるが、母親同士の互助機能としては、サロンにおけるボランティア参加・活動と、サロンの利用による子育てサロンの機能促進があげられる。

センター型のサロンでは、利用者の母親自身による子育て支援ボランティア等の道具的サポートはみられない。一方、「機会・場の利用」に関しては、同年齢の母親の利用者がおり、交流の機会が期待できること自体がサロンの魅力となっている。ただし、「〔児童館は〕顔見知りが多い。最初はグループがあって入りにくかった。センターは、〔ママ友と一緒にでなく〕一人で来ている人もいるし、先生たちも多く、来やすい。(A28)」という意見が示すように、Aセンターでは、グループ利用者がいる場合でも、単独で来ている母親が、他の利用者との儀礼的な会話や社交の難儀、あるいはグループからの疎外感を感じずに利用できるという点で、利用の「気

楽しさ」があるといえる。

児童館型のサロンでは、「子どもを遊ばせるため、子どもの友達ができるかなと思って〔利用しに来た〕。自分の友達〔づくり〕も。同じ年齢の母親がいるので。ここに来たら話す人がいる。(C1)」というように、地域の子どもの同士やママ友同士の交流・親交が主な利用目的となっており、地域の母親が集まっていること自体が利用者を引き寄せ、サロンの機能を向上させている。

地域主体型のサロンについても、「〔利用目的は〕ママ友づくり、子どもの交流。(G1)」というように、地域の母親による利用が、サロンの機能を促進する表出的サポートとなっている。しかし、児童館型と同様に、地域主体型でも、母親によるボランティア参加といった道具的サポートはみられない。

他方、常設ひろば型のサロンについては、4種類の中で唯一、利用者の母親自身による子育て支援ボランティアへの参加や活動といった道具的サポートがみられる。例えば、NPO サロン I では、「ダンス教室」等の母親企画が実施されており、また、サロンの OG や年長児をもつ母

表5 子育てサロンの類型別にみた母親同士の育児援助機能

	A. 直接サポート		B. 間接サポート		C. 複合サポート	
	道具的 ①預かり・見守り	表出的 ①遊び相手	道具的 ①助言 ②情報提供 ③家事・送迎援助	表出的 ①相談相手 ②社交・会話	道具的 ①ボランティア参加・支援活動	表出的 ①機会・場の利用
センター型	×	△ ①親子同士一緒に遊ぶ	△ ②初対面で情報交換	△ ②初対面で社交	×	△ ①親子が集まる場、利用の気楽さ
児童館型	○ ①母親が離れる際は見守る	○ ①他の子どもと一緒に遊ぶ	◎ ①②ここで聞く・教えてもらう ③車で買い物、送迎	◎ ①ここで相談する ②ここに来て色々話す、気分転換	×	◎ ①ここに来れば誰かいる、顔見知りがある、ママ友づくり
地域主体型	×	×	○ ②地域の母親同士情報交換	○ ②地域のお母さんと話ができる	×	○ ①ママ友づくり
常設ひろば型	◎ ①お互いに見守る、誰が誰の子どもか分からない	○ ①他の子どもと一緒に遊ぶ、自分の子以外とも遊ぶ	◎ ①ここで教えてもらう ②ここで聞くことが多い	◎ ①この人とは相談できる ②ここでわいわい話す	○ ①母親企画、イベントでボランティア参加	◎ ①グループが無くみんな仲が良い、仲間

◎よく当てはまる、○当てはまる、△少し当てはまる、×当てはまらない

親が、イベントのボランティアやスタッフとして活動している。表出的サポートに関しても、「児童館は年齢の近い子のお母さんでグループができているが、ここはみんなが仲良い。(I3)」、「〔児童館と比べて〕アットホームな感じ。(H3)」等、利用者の雰囲気の良さがサロンの魅力となり、利用者を惹きつけていると考えられる。

表5は、4種類の子育てサロンにおける母親同士の互助に関する以上の内容をまとめ、調査結果から互助機能の程度を◎○△×といった記号で示した表である。センター型や地域主体型と比べ、児童館型と常設ひろば型のサロンにおける母親同士の互助は多面的で、活発である。とくに、他の子どもに対して行う見守りや預かり等の直接サポートは、センター型や地域主体型のサロンではあまりみられない。一方で、情報交換や社交といった間接サポートと、機会・場の利用による複合サポートの表出的側面については、すべての子育てサロンで確認された。しかし、母親自身が他の母親のために行う子育て支援のボランティア活動といった複合サポートの道具的側面については、常設ひろば型のサロンで一部みられただけである。

7 母親集まりから子育ての福祉コミュニティへ

以上、制度的支援としての子育てサロンと、その内部における関係的支援としての母親同士の育児援助機能について、子育てサロンの類型ごとに、直接・間接・複合といった3つのサポート機能から分析した。これまでの内容から、4種類の子育てサロンでみられる母親の集まりの特徴と、その集まりにおける母親同士の互助の段階を図示したのが図2である。ここでは、金子(2007, 2011)のコミュニティ論における「集まりの三類型」⁽⁷⁾である coming-keeping-working の3段階を、各子育てサロンにおける母親の集まりに対応させている。さらに、母親集まりの段階として「①共同利用－②共同体験－③共同経験－④共同援助－⑤共同活動」を提示し、母親同士の互助の段階と並べて整理した。

センター型の子育てサロンの利用者はとくに、設備の良い遊び場としてのサロンの機能を重視しており、子どもを「遊ばせるため」といった遊び場の利用が中心であるが、通院や買い物等の「ついで」利用も多い。また、開催時間が長く、利用者は不定期的に利用しているため、母親同士が再会する機会は少なく、多くが初対面である。このため、社交的な会話を楽しんだり、情報交換をしたり、子ども同士を一緒に遊ばせ、同じ紙芝居を楽しむことはあっても、そこで知り合った母親と名前や連絡先を交換して継続的なママ友関係を構築することは稀であり、他の親子と交流せず過ごす親子の姿も珍しくない。以上より、センター型のサロンにおける母親の集まりは、遊び場の「共同利用」を目的とした段階①の手前から、子ども向け企画の「共同体験」の段階②にあり、強度の弱い coming の段階にある集まりであるといえる。

一方、児童館型の子育てサロンは、週1回以上など頻繁に利用されており、また、毎週同じ時間に同じ母子が定期的に集まるため、母親同士は顔見知り以上の関係性であることが多い。

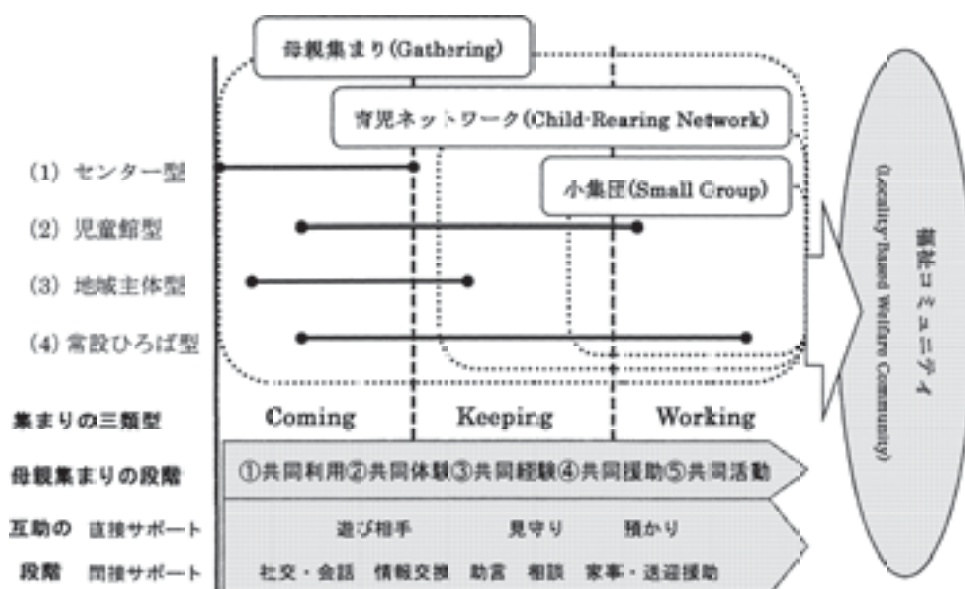


図2 子育てサロンの類型別にみた母親集まりと互助の段階

出典：金子（2007：39-40，2011：23-25）を参考に筆者作成

利用目的も、子どもの遊びや交流だけでなく、ママ友づくりや特定のママ友との交流など、母親自身のネットワーク形成にも重きが置かれており、一部、サロン内部に特定のママ友集団、あるいは互助集団が形成されている。子育てサロンにおける母親同士の互助も、情報交換や子どもの見守りだけでなく、育児に関する助言や、悩みの相談等が行われ、年齢の大きい子どもがいる場合等には、サロン以外で互いの家を行き来し、子どもの預かりや、送迎などのサポートを行う場合もある。このように、児童館型の子育てサロンにおける母親の集まりは、場所の「共同利用」という段階①から子育ての「共同経験」や「共同援助」までの段階④にあり、特定の集まりと母親同士の関係性が維持され、ネットワークや集団の形成がみられる keeping や working の段階にあるといえる。

地域主体型の子育てサロンは、毎日開催されているセンター型とは対照的に、月に1回の開催であるために利用者の利用頻度は少ないが、児童館型と同じように利用者の大半が同一地域に住む母子であり、一部は近隣の児童館とともに定期的にサロンを利用し、ネットワークを形成している。このため、母親の集まりは、遊び場の「共同利用」やイベントの「共同体験」だけでなく、幼稚園就園前の一定期間、サロンを介して子育てを「共同経験」している。また、互助については、初対面の母親同士の社交から、同じ地域に住む母親同士の情報交換などがみられる。集まりの類型としては、およそセンター型と児童館型の中間に位置し、coming から keeping にかかる段階である。

常設ひろば型の子育てサロンは、4種類の中で最も広域な互助の段階がみられ、そこにお

る母親集まりでは、子育て当事者である母親自身が主体となって子育て支援の活動を行う working の段階がみられる。専門職員や高齢者ボランティアが主体となって運営されている他の3種類のサロンと比べ、常設ひろば型のサロンは、子育て経験がある、あるいは子育て中の母親が運営側にいるため、利用者の母親も支援を提供されるだけではなく、様々な企画に際して、支援を提供する側に関わる機会が与えられている。とくに NPO サロン I は、もともと子育て中の母親が主体となって設立したサロンであり、運営側も「母親の力を発揮させる仕掛け」を意識して企画や活動を実施し、利用者の母親を積極的に支援側に動員している。また、児童館同様、同一地域の母親同士が日常的に集まることで育児ネットワークが形成されており、NPO サロン I では、多くの母親がサロンにおける集まりを「みんな」と呼んでおり、集団に対する帰属意識もみられた。

このように、各類型の子育てサロンにおける母親集まりは、そこで行われる互助の段階と並行して、集まりの強度も増していく。Goffman によれば、社会的集まり (gathering) とは、一定の連続した時間内に直接的に居合わせている2人以上の人々の集合であるとされる (Goffman, 1963=1980: 20, 261)。子育てサロンにおいて形成される社会的集まりが、育児ネットワークとなり、その一部に複数あるいはサロン全体で一つの小集団(クリーク)⁽⁸⁾の要素をもち、地域における「支えあい」⁽⁹⁾として機能する福祉コミュニティ(金子, 2011: 25)へ展開する可能性を検討すれば、母子を中心とした集まりからコミュニティへの発展過程には、以下のような段階が考えられる。

まず、制度的支援として設置された子育てサロンという一定の空間内部に、地域の母子を中心とした集まり (gathering) が生じ、コミュニティづくりの萌芽となる (coming)。遊び場やおもちゃの共同利用から、親子同士が出会い、言葉を交わすことで社交が始まり、子どもの遊び相手や情報交換といった互助に発展する。地域ボランティアや専門職員による企画や支援を共同体験している時点では、まだ母親同士は互いの名前も知らずに交流しているが、定期的なサロン利用によって集まりが維持されるうちに (keeping), 母親同士が様々な機会を通して子育てを共同経験し、ママ友関係および育児ネットワーク (child-rearing networks) が形成される。さらに特定の育児ネットワーク内で、子どもの見守りや育児の助言、相談といったサポートが交換され、場合によっては預かりや送迎といったサポートも含めた共同援助が行われるようになる。子育てサロンで形成された一部のネットワークは集団的な直接結合 (small groups/ cliques) となり、複合サポートの機能によっては、そこから利用者である母親自身による支援活動など、集まりの活用が行われる (working)。以上の諸段階を経て、子育てサロン利用者である母子の集まりを中心に、専門職員やスタッフ、利用者の家族、性別や世代の異なる地域住民等から成る、子育てをめぐる「支えあい」の福祉コミュニティ⁽¹⁰⁾への発展が考えられる。

8 おわりに

本稿では、札幌市における質的調査の結果をもとに、都市の母親の子育てを支える育児援助システムとして、子育てサロン（地域子育て支援拠点）による制度的支援と母親同士の関係的支援の機能を分析した。また、子育てサロンの4つの類型ごとに、そこで形成・発展する母親集まりの段階を、母親同士の互助の段階と関連付け、考察した。

乳幼児とその母親が地域社会から孤立しやすい社会状況の中で、4種類の子育てサロンは、いずれも、フォーマルな育児援助サービスを提供しつつ、地域社会の中で母子が集い、インフォーマルな育児援助を交換する場としても機能している。一方で、各子育てサロンは、類型ごとに制度的支援としての機能だけでなく、内部で形成される育児ネットワークや関係的支援の機能が異なっている。子育てサロンは、どれか一種類が理想型であるのではなく、利用者の母親が、利用目的や都合、雰囲気などで多様な種類の中から選択できるほうが、子育て環境としては充実しているといえるのではないだろうか。

育児期女性のネットワークは、子どもという「制約」によって、空間的には地域内に集中し、構造的には出会いの文脈の多様化によって分散的になりやすいとされている（松本，1995：71-80）。しかし、人口移動性の高い都市では、「子どもを通して人と知り合える（A23・A27・B7）」というように、転居や離職で縮小した母親のネットワークが、子どもをきっかけに再編・拡大される場合があり、子育てサロンはその機会財となっている。本稿の分析が示しているように、母親の「子育て」にとって、同質的なネットワークは、人びとが「互いによりしっくりした感じをもち、理解し合い、報酬を得る」（Fischer，1982=2002：275）という正の効果をもつ場合もある。しかし、「子育て」の観点でいえば、子どもの成長には多様な大人とふれあう機会が重要であり、サロンの内部で子どもが会える他者が同年齢の母子だけに偏ることは必ずしも望ましいとはいえないだろう。家庭内における第一の母子孤立の解消に終始せず、地域社会における第二の母子孤立を避けるためには、性別・世代混成的なコミュニティづくりの視点が重要である。今後は、「資源」と「拘束」（野沢，2009：60-63）というネットワークの両側面を念頭に置きながら比較地域を増やし、子育てサロンの機能について、さらに分析を進めていきたい。

なお、今回の調査は、対象者が子育てサロンの利用者に限定されているが、例えば、宮坂（2000）による「公園づきあい」に関する研究では、公園以外における利用可能なネットワークの存在やネットワークの閉鎖性が、公園利用に影響していることが明らかにされている。したがって、子育てサロンの利用についても、より妥当な分析には、非利用者に関する検討が必要である。

また、子育て環境の向上には、保育や教育の諸制度、養育や生活の保障、男女の働き方や地域参加等を含めた全体的な議論が不可欠である。今回の分析で使用した「子育てサポートシステム」の分析枠組みを応用し、子育てサロン以外の施策や全体社会レベルの包括的な子育て支援についても検討していきたい。

[注]

- (1) こうした地域子育て支援拠点は、典型的には「センター型」、「ひろば型」、「児童館型」の3つのタイプに分けることができる(厚生労働省, 2007)。基本的な事業内容としては, ①子育て親子の交流の場の提供と交流の促進, ②子育て等に関する相談・援助の実施, ③地域の子育て関連情報の提供, ④子育て及び子育て支援に関する講習等の実施であるが, 近年はこれに加えて, ④子育て支援の情報の集約・提供といった「利用者支援機能」と, ⑤親子の育ちを支援する世代間交流やボランティア等との支援・協力といった「地域支援機能」を政策的に強化する動きもみられ, 実施形態や支援内容の多様化が進んでいる(厚生労働省, 2013)。
- (2) 育児ネットワークの定義としては, 子育てを直接・間接にサポートしている近隣や子育て期の仲間, それ以外の友人, 親族等の「人的なネットワーク」(松田, 2010: 92)とする立場と, 山縣ら(2013)のように, 子育てサークルや支援団体等を「子育てネットワーク」とみる立場がある。本稿では, 前者にならない, 乳幼児の母親の育児遂行に対するソーシャル・サポートを提供するパーソナル・ネットワークを育児ネットワークとみる。
- (3) 2010年の国勢調査のデータから算出したところ, 夫が就業者で, 6歳未満の末子がいる夫婦と子ども世帯のうち, 妻が非就業者である割合は, 全国平均の56.8%に対し, 札幌市はそれを大きく上回る65.6%であった。また, 札幌市では, 男性雇用者のうち, 年間就業日数が250日以上との割合は58.7%であり, 同じく週間就業時間が60時間以上の割合も21.7%と, 政令指定都市の中で最も高い(札幌市, 2010: 19)。
- (4) ワーカーズ・コレクティブとは, 地域で暮らす人々が, 生活者の視点から地域に必要な「もの」や「サービス」を市民事業として事業化し, 自分達で出資, 経営し, 労働をも担う働き方を指す。自主管理する労働であり, 一般的な雇用非雇用の関係ではなく, 主体的な働き方とされる。労働に対しての報酬は受けるが, 利益を生み出す事が主目的でない非営利事業であり, 事業内容は地域や社会に有益なものであることが原則とされる(NPO法人ワーカーズ・コレクティブちいさなおうち, ホームページより)。
- (5) 調査結果では, A センター, B センター, C 児童館, D 児童館, E 児童館, 地域サロン G, NPO サロン H, NPO サロン I での調査回答者を, 順に A~I の識別番号で表記する。
- (6) 金子によれば, 社会的支援は「自助・互助・共助・公助・商助」に分類される。「自助」とは, 自分自身や家族からの援助といった私的支援を指し, 「互助」とは, 支援者と被支援者とのボランティア関係, 相互支援を意味する。「共助」とは, コミュニティからの支援や地域福祉活動等の共同支援のことをいい, 専門家による専門サービスや現金給付といった公的支援は「公助」, 福祉ビジネス等は「商助」に分類される(金子, 2003: 174)。
- (7) 金子によれば, コミュニティづくりの主な要件は, 居住者による集まり(togetherness)であり, 個人あるいは集団・団体を軸として, 一定の空間内部に集まりができれば, コミュニティづくりへの萌芽になる。それが育つかどうかは, 集まりの強度によるが, これを集まりの段階, すなわち“experiencing together”のサブカテゴリーとすると, 次の3類型があるとされる(金子, 2007: 39, 2011: 23-24)。
第1段階 Coming together is a beginning. (実践的集まりの創造から開始)
第2段階 Keeping together is progress. (実践的集まりの維持が前進)
第3段階 Working together is success. (実践的集まりの活用が成功)

- (8) ネットワークに含まれるメンバー相互の直接結合によって構成されるネットワーク内の小集団は「クリーク (clique)」と呼ばれる(野沢, 2009: 56)。野沢によれば, 一般に, 方法としてのネットワーク概念は, こうしたネットワークの集合的要素を与件として排除するものではなく, それを含む多様性を分析するための道具であるとされる(同書: 60)。
- (9) 福祉コミュニティ機能の「支えあい」の下位概念には「調べあい・触れあい・癒しあい・繋ぎあい・学びあい・広めあい」がある(金子, 2011: 25)。
- (10) ただし調査結果を見る限りでも, 今日ではインターネット等を通して「地域を超えて」活用される育児ネットワークや, SNS (例えば『mixi』) 上に形成される「バーチャル」なコミュニティの育児援助機能も見過ごせない。

[文献・資料]

- 傳馬淳一郎, 2006, 「『子育て支援』概念に関する研究——親子を取り巻く環境と, 支援の機能」『北星学園大学大学院論集』9: 13-30.
- Fischer, C.S., 1982, *To Dwell among Friends: Personal Networks in Town and City*, Chicago: University of Chicago Press. (=2002, 松本康・前田尚子訳『友人のあいだで暮らす——北カリフォルニアのパーソナル・ネットワーク』未来社.)
- 船橋恵子, 1999, 「〈子育て〉の社会的支援と家族」『家族社会学研究』11: 25-35.
- Goffman, Erving, 1963, *Behavior in Public Places: Notes on the Social Organization of Gatherings*, New York: Free Press. (=1980, 丸本恵祐・本名信行訳『集まりの構造——新しい日常行動論を求めて』誠信書房.)
- 實川慎子・砂川史子, 2012, 「就労する母親の『ママ友』関係の形成と展開——専業主婦との比較による友人ネットワークの分析」『千葉大学教育学部研究紀要』60: 183-190.
- 金子勇, 2003, 『都市の少子社会——世代共生をめざして』東京大学出版会.
- 金子勇, 2007, 『格差不安時代のコミュニティ社会学——ソーシャル・キャピタルからの処方箋』ミネルヴァ書房.
- 金子勇, 2011, 『コミュニティの創造的探究——公共社会学の視点』新曜社.
- 国立社会保障・人口問題研究所, 2013, 「人口統計資料集」, (<http://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Popular/Popular2013.asp?chap=0>), 2013-08-20.
- 厚生労働省, 2007, 「地域子育て支援拠点事業——実施のご案内」, (<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/pdf/gaido.pdf>), 2013-08-20.
- 厚生労働省, 2010, 「平成 22 年度総合評価書『子ども・子育て応援プラン』について」, (<http://www.mhlw.go.jp/wp/seisaku/jigyuu/10sougou/dl/b.pdf>), 2013-08-20.
- 厚生労働省, 2011, 「平成 23 年度 地域子育て支援事業実施箇所数(子育て支援交付金交付決定ベース)」, (<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dl/23jokyo.pdf>), 2013-08-20.
- 厚生労働省, 2012, 「平成 24 年度 地域子育て支援事業実施箇所数(子育て支援交付金交付決定ベース)」, (<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dl/24jokyo.pdf>), 2013-08-20.
- 厚生労働省, 2013, 「地域子育て支援拠点事業とは(概要)」, (http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dl/kosodate_sien.pdf), 2013-08-20.
- 工藤遥, 2013, 「都市の子育てをめぐるサポートシステム」『現代社会学研究』26: 55-71.
- 前田尚子, 2003, 「地方都市における育児期女性のパーソナル・ネットワーク」『岐阜聖徳学園大学短期

- 大学部紀要』35：53-67.
- 前田尚子，2004，「パーソナル・ネットワークの構造がサポートとストレーンに及ぼす効果——育児期女性の場合」『家族社会学研究』16(1)：21-31.
- 松田茂樹，2001，「育児ネットワークの構造と母親の Well-Being」『社会学評論』52(1)：33-49.
- 松田茂樹，2008，「何が育児を支えるのか——中庸なネットワークの強さ」勁草書房.
- 松田茂樹，2010，「子育てを支える社会関係資本」松田茂樹・汐見和恵・品田知美・末盛慶著『揺らぐ子育て基盤——少子化社会の現状と困難』勁草書房：91-113.
- 松本康，1995，「現代都市の変容とコミュニティ，ネットワーク」松本康編『増殖するネットワーク』勁草書房：1-90.
- 宮坂靖子，2000，「育児不安と育児ネットワーク——『公園づきあい』の視点から」『家族研究論叢』6：55-76.
- 内閣府，2004，『平成16年版少子化社会白書』.
- 内閣府，2005，『平成17年度版国民生活白書』.
- 内閣府，2008，『平成20年版少子化社会白書』.
- 内閣府，2010，『平成22年版子ども・子育て白書』.
- 内閣府，2012a，「子どもや家庭の状況に応じた子ども・子育て支援について（案）」，(http://www8.cao.go.jp/shoushi/10motto/08kosodate/wg/youho/k_8/pdf/s1.pdf)，2013-08-20.
- 内閣府，2012b，『平成24年版子ども・子育て白書』.
- 野沢慎司，2009，『ネットワーク論に何ができるか——「家族・コミュニティ問題」を解く』勁草書房.
- NPO 法人ワーカーズ・コレクティブちいさなおうち，ホームページ，(<http://members3.jcom.home.ne.jp/chiiisanaouchi.nishino.sapporo/index.htm>)，2013-08-20.
- 落合恵美子，1989，「現代家族の育児ネットワーク」『近代家族とフェミニズム』勁草書房：93-135.
- 札幌市，2010，『さっぽろ子ども未来プラン（後期計画）概要版』札幌市子ども未来局子ども育成部子ども企画課.
- 札幌市，ホームページ，(<http://www.city.sapporo.jp/index.html>)，2013-10-21.
- 関井友子・斧出節子・松田智子・山根真理，1991，「働く母親の性別役割分業観と育児援助ネットワーク」『家族社会学研究』3：72-84.
- 総務省統計局，2010，「平成22年国勢調査」，産業等基本集計＞全国結果＞第23表，(<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001038689&cycode=0>)，2013-08-20.
- 杉江栄子，2010，「子育て支援センターにおける環境構成のあり方——母親同士の関係性を構築する視点から」『愛知教育大学幼児教育研究』15：25-32.
- 立山徳子，2011，「都市空間の中の子育てネットワーク——『家族・コミュニティ問題』の視点から」『日本都市社会学会年報』29：93-109.
- 山縣文治監・中谷奈津子編，2013，『住民主体の地域子育て支援——全国調査にみる「子育てネットワーク」』明石書店.
- 山根真理，2006，「育児不安と家族の危機」広田照幸監編『子育て・しつけ』日本図書センター：53-68.